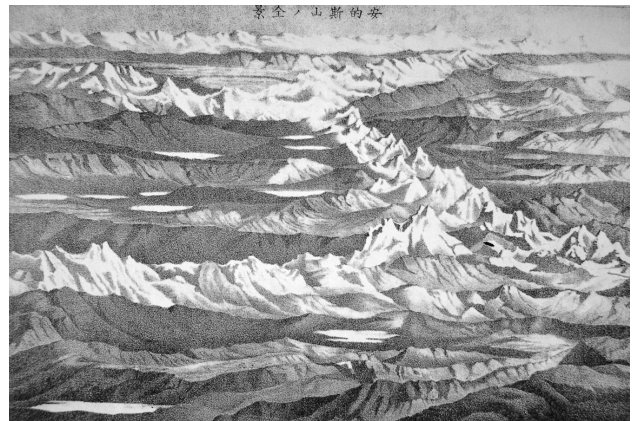


見える民族・見えない民族 — 『輿地誌略』の世界観

増野 恵子



見える民族・見えない民族 — 『輿地誌略』の世界観

増野 恵子

(早稲田大学非常勤講師・2004年度COE共同研究員)

はじめに

稿者は、本稿において明治初期のベストセラーの一つである啓蒙的地誌書『輿地誌略』が明治初期の日本に伝えたものについて考える。まず、調査によって得られた図版の典拠に関する発見を報告する。その成果をふまえ、それら図版が何を伝えているのかについて、考え得るいくつかの可能性を検討することとする。なお、本稿中に引用の形で、現在は使用されない差別的な語を用いる場合があるが、当時の世界認識のあり方を考えるという目的をふまえ、原文のままとしたことをあらかじめお断りしておく。

『輿地誌略』の編者内田正雄について

まず、編者である内田正雄（1838～1876）の履歴を簡単に述べておく。

内田は、天保九年（1838）御家人萬年三郎兵衛の次男として江戸に生まれ、のち旗本内田主膳の婿養子となって内田姓を名乗る。安政四年（1857）、オランダ語力と才を買われ長崎海軍伝習所の第三回伝習生に選抜され、伝習所が廃止となる安政六年（1859）まで数学や測量学、航海学をオランダ人教師について学んだ。文久二年（1862）、幕府はオランダに軍艦の建造を依頼するとともに、軍艦操縦の技術や学術を学ぶ留学生の派遣を決める。内田はこの留学生十五人の一員に選ばれ、翌年からオランダで語学、機械学、化学などを学んだ。彼は一行の中で最も身分の高い旗本の出であったことから、留学生の代表である取締役を命じられ、御用金の管理を行うとともに、幕府の遣使使節の応接なども担当している。慶応三年（1867）、竣工した蒸気式軍艦開陽丸に乗船して帰国。その後ほどなくして幕府は瓦解するが、維新後は名を正雄と改め明治政府に出仕、開成所・文部省に勤める。明治六年（1873）に辞職後は翻訳・著述に専念するが、明治九年（1876）、病を得て三十九才で没した⁽¹⁾。

海軍士官の訓練のためオランダ留学まで果たした内田だが、実際は軍事よりも美術に強い関心を抱く文人肌の人物で、美術品の蒐集を趣味とし、また自身も絵画を描いた⁽²⁾。彼は欧州留学中に彼の地の画家の手になる油彩画を購入、日本に将来し、明治初年の博覧会や物産会に繰り返し出品した。まだ日本国内では本物の油彩画など見ることもかなわなかった時代、ヨーロッパからもたらされたそれらの作品は、見る者に強烈な印象を与えたことが記録に残されている⁽³⁾。彼のヨーロッパ留学は、軍事よりもむしろ美術の分野で大きな実りをもたらしたといっても過言ではない。

内田は帰国後海軍ではなく文部省に籍を置き、明治五年（1873）の奈良の社寺宝物調査にも関与しているが、彼の業績として記憶されているのは後年の執筆活動であり、なかでも明治初期の大ベストセラーとなった『輿地誌略』は、彼の代表的な著作と位置づけられている。

『輿地誌略』とその挿図

この内田が著した『輿地誌略』とは、明治四年（1871）から刊行が始まり、明治十三年（1880）に全巻が完結した全四篇十二巻（全十三冊）の世界地誌書である。内田の手になる凡例によれば、彼はオランダ留学時に入手した「マツケー氏」「ゴールド、スミス」氏および「カラームルス氏」その他の地理書に拠ってこの本を執筆したという⁽⁴⁾。内容は、世界各国の国勢や政体、風俗、歴史を五つの地域に分けて記述した啓蒙的なもので、当時の青年の間で大いに読まれたという。その人口への膾炙の程は、後に福沢諭吉『学問ノスゝメ』、中村正直『西国立志編』と併せ「明治の三書」と称されるほどであった。巻九の刊行後に内田が逝去し、刊行頓挫の危機を迎えるが、文部省時代の同僚であった西村茂樹が彼の遺志を継ぎ、遺された草稿を元に執筆・編集を行って全巻を完結させている。第一編（巻一～三）は大学南校、第二編（巻四～七）文部省からそれぞれ発行され、これ以降は発行元が変わって終巻まで修静館、つまり内田家から出版されている。

この本がどれほど読まれたかを示す数字を挙げてみたい。『輿地誌略』は前述の通り七巻までは国から出版されたいわゆる「官板」の刊行物で、当時各府県の小学校や師範学校の教科書として用いられた。文部省が発行した報告類によれば、明治七・八年時点の印刷部数は約十五万あるいは約十二万となっている⁽⁵⁾。報告中で印刷部数が明記されている出版物の中ではまさに桁違いの数であるが、この時点で『輿地誌略』はまだ刊行途中であること、また教科書としてだけでなく、広く一般でも読まれたことを考えるならば、それらを含めた総発行部数は更に増えることは確実である。『輿地誌略』が明治の三大書に数えられる所以である。

さて、『輿地誌略』では世界の文化・風俗をテキストだけでなく多くの図版によって解説しているのが特徴である。掲載されているそれらの図版は、同時代に刊行された『世界国尽』（福沢諭吉著、明治五年）や『万国地誌略』（文部省、明治七年）といった地誌書と比較しても点数、サイズ、図の精巧さのどの点においても飛び抜けた充実ぶりを示している。内田は『輿地誌略』巻一の凡例で「各国ノ人物風俗及ビ屋宇山川等ノ形状ノ如キ文辞ヲ以テ尽シ難キ者図画ヲ以テ会得スルニ若クハナシ」と記し、イメージによってより豊かで正確な情報を読者に伝えるため、挿図を活用したと述べている。彼自身の希望としてはこの十倍以上の図を載せたかったとも書いており、明らかに視覚情報に大きな比重を置いてこの本が執筆されたことがうかがえる。

以下に挙げるのは、『輿地誌略』各巻の内容と用いられている挿図の数である。

【『輿地誌略』掲載図版点数一覧】（図版点数後ろの括弧は図版に含まれる地図の点数）⁽⁶⁾

第一編

巻一 序・凡例・総論（天文部・地理部・邦制部）・亜細亞洲上（総論・日本）23点（4）

巻二 亜細亞洲中（中国・シベリア・東南アジア・南アジア）38点（4）

巻三 亜細亞洲下（ペルシア・トルキスタン・トルコ【小アジア】・アラビア）40点（5）

第二編

巻四 欧羅巴洲之部一（ヨーロッパ総論・イギリス）23点（4）

巻五 欧羅巴洲之部二（フランス・オランダ・ベルギー・スペイン・ポルトガル）21点（4）

巻六 欧羅巴洲之部三（ドイツ総論・プロシア・オーストリア・デンマーク・スウェーデン及びノルウェー）28点（2）

巻七 欧羅巴洲之部四（ロシア・スイス・イタリア・ギリシア・トルコ・ルーマニア）27点（4）

第三編

巻八 亜非利加洲上（アフリカ総論・エジプト・バルバリー総説・西北岸諸島）26点（3）

巻九 亜非利加洲下（セネガンビア・スーダン・ギニア総説・ホッテントット・ケープコロニー・ケープ北部・東岸諸部総説・大湖地方・マダガスカル）30点（4）

第四編

巻十 亜米利加洲上（アメリカ総論・北アメリカ）41点（4）

巻十一上 亜米利加洲中（中アメリカ・西インド諸島・南アメリカ総論）50点（1）

巻十一下 亜米利加洲下（南アメリカ）40点（0）

巻十二 阿西亜ニ亞洲・南極州 25点（1）

全十二巻（十三冊）の各巻の丁数は五十一から百八までばらつきがあるが、平均すると二丁半（五頁）に一点程度の割合で地図を除く挿図が用いられていることになる。

官板の『輿地誌略』では巻七までの図版はすべて川上寛、すなわち洋風画家川上冬崖が描いた図を木版画に刷ったものが用いられている。巻八以降の修静館版『輿地誌略』の挿図は、巻八・九がすべて銅版画、巻十～十二には銅版画と石版画が混在している。銅版は江戸以来の有力な版元として知られる松田緑山の玄々堂と梅村翠山の第二彫刻会社（慶岸堂）が、また石版は同じく玄々堂が制作していることが図版欄外の署名によって判明する。しかし同じ版であっても図版の彫りに違いが見られたり、また翻刻版によっては画者や版画作者名が全く異なっていたりと図版については様々な異動が見られ、挿図の製作過程に多くの問題を投げかけている⁽⁷⁾。

ともあれ、木版から銅版画、石版画と技法を変えて迫真性を追求し、異国の風景や風俗を活写した数々の挿図はまぎれもなく『輿地誌略』の魅力の重要な一部であり、当時人気を博した理由の一つであったと言っても過言ではない。

『輿地誌略』図版の原典について

内田によれば、これらの挿図の多くは彼が欧州留学中に集めた各国の「捉影画（フマトグラヒー）」三千枚あまりと、フランスで毎年発行されている『ルツール、ジユモンド』世界各地ノ旅行記ノ類⁽⁸⁾掲載の図版から図版を模写したという。

『輿地誌略』の挿図について池田厚史氏は、現在『万国写真帖』の名で東京国立博物館に所蔵されている明治期の写真アルバム二十一冊を調査し、それが内田正雄旧蔵のものであり、そこに収められた写真を引用・再構成して『輿地誌略』の挿図二十五点が制作されていることを突き止められた⁽⁹⁾。他、いくつかの先行研究によってこれまで数点の挿図の原画が特定されている⁽¹⁰⁾。とはいえ、四百点近い図版のうち、典拠が判明しているのは合計三十点ほどに過ぎない。

内田自身が凡例の中で「捉影画（フマトグラヒー）」を元にしたと記していることもあり、これまで『輿地誌略』の図版は「写真」がイメージソースになっていると漠然と信じられてきた。しかしそれらの挿図では、構図やタッチがすでに絵画として一度整理されている様子が見られることから、写真ではなく絵画化されたイメージ

がその下敷となっている可能性が高いと考えられる。

そこで稿者は、内田が凡例の中で言及しているもう一つの典拠である、「ルツール、ジユモンド」の中に挿図のソースとして用いられている原画があると想定し、調査を行った。その結果、『輿地誌略』に掲載された挿図の半数近くが、19世紀中頃にフランスで創刊された雑誌『Tour du Monde : nouveau journal des voyages』に掲載されている図版を模写したものであることが判明した。以下、調査によって判明した概要を述べてみたい。

旅行雑誌『Tour du Monde』とEdouard Charton

『Tour du Monde : nouveau journal des voyages』(以下『Tour du Monde』)とは、1860年、パリのアシェット (Hachette) 社から創刊された、世界各地への旅行記を紹介する雑誌である。記事の載った冊子が毎週発行され⁽¹¹⁾、年に二回出される目次と図版一覧、正誤表とあわせて製本すると、一年間に刊行された冊子を二巻本に仕立てることができた。このシリーズは1894年まで刊行された後、1895年からは『Tour du Monde. Nouvelle serie : journal des voyages et voyageurs』というタイトルの新シリーズとなり、その後1914年まで発行された。

アシェット社と協力してこの雑誌を立ち上げたのはエドゥアール・シャルトン (Édouard Charton, 1807-1890) である。弁護士であり、穏健な共和主義者として政界で長く活動したシャルトンは有能な編集者としても知られた。1833年に手がけた『Magasin Pittoresque』や、1843年の創刊に関わった『Illustration』はいずれもめざましい成功を取め、フランスでの絵入り雑誌の基礎を創ったとされる⁽¹²⁾。

さて『Tour du Monde』は同時代の、世界のあらゆる場所への旅行、探検の記録を取り上げることを主眼としていた。商用であろうと学術調査であろうと単なる好奇心であろうと旅の目的を問わず、また未発表のものはもちろん、すでに出版された記録であっても、信頼に足り、取り上げるだけの価値があると判断したら掲載をためらわなかった⁽¹³⁾。従って、毎号掲載される旅行記も探検記から考古学調査、自然科学のフィールドワーク等極めてヴァリエティに富み、関心の異なる幅広い読者層を引きつけることとなった。

加えてこの雑誌の大きな特徴として、挿図にテキストと同等の重要性をおいていた点が挙げられる。シャルトンはそれまでの雑誌制作で培った人脈を生かし、当代一流の画家・彫刻師を起用し、木口木版による精巧な挿図を毎号付すことにした。『Tour du Monde』の成功には、この方針が深く関わっていたという⁽¹⁴⁾。『Tour du Monde』の図版は、旅行記の筆者が描いたスケッチを元に挿絵画家が図を描きおこしたり、他の本の図版や写真を用いて描いたものが多いが、中には画家が旅行に同行して挿絵を制作する場合もあった。

既に述べたように、内田は文久三年 (1863) から慶応二年 (1866) まで幕府派遣留学生としてオランダにあった。彼は自筆の記録をほとんど残していないため、この時期の足どりをたどることは難しい。しかしオランダ滞在時にはイギリスの絵入り新聞『Illustrated London News』を愛読していたともいわれるように⁽¹⁵⁾、おそらく欧州留学中に当時出版されていたヨーロッパの絵入り雑誌類を日常的に目にしていたと思われる。『Tour du Monde』の第一シリーズは1894年まで刊行が続くが、『輿地誌略』挿図への引用は、1860年の第一巻から1867年の第二巻までに掲載された図版に集中している。これは内田の留学期間とはほぼ一致しており、彼がこの雑誌を滞欧中に買い求め、帰国の際に持ち帰ったことの傍証となる。

図版引用の実態

続いて、この絵入り雑誌から『輿地誌略』へ図版がどのように引用されているのかを見ていきたい。

引用された図のほとんどは『Tour du Monde』を正確に引き写しており、絵師や画工達が原図を参照しながら図版を制作したと推測できる。内田没後、西村茂樹が編集を引き継いだ後もここから図版の引用が行われていることに変わりはない。

では引用された図版の点数を確認しておこう。『輿地誌略』全十三冊に掲載された挿図総数は376点（地図を除く）、このうち『Tour du Monde』からの引用が認められた図版は195点である。単純に引用率を計算すると51.8%となり、約半数の図版が『Tour du Monde』から引用されていることになる。『輿地誌略』巻毎の引用図版数は次の通りである。

【『輿地誌略』各巻の引用図版点数一覧】

『輿地誌略』掲載挿図（地図を除く）		『Tour du Monde』からの引用が判明した点数	引用率
巻一	19 ⁽¹⁶⁾	0	
巻二	34	25	
巻三	35	24	
アジア総計	69	49	71.0%
巻四	23	0	
巻五	17	1	
巻六	26	11	
巻七	23	7	
ヨーロッパ総計	89	19	21.3%
巻八	23	15	
巻九	26	23	
アフリカ総計	49	38	77.5%
巻十	37	19	
巻十一上	49	33	
巻十一下	40	23	
南北アメリカ総計	126	75	59.5%
巻十二	24	14	
オセアニア総計	24	14	58.3%
全巻総計	376	195	51.8%

では、五大陸を紹介するために用いられた図版とその原図の一部を、『輿地誌略』の巻の構成に従って比較してみたい。

図1は巻二「亜細亞洲中」に掲載された「満州人風俗之図」で、原図はパルガ・シェフスキーによる旅行記「Le Fleuve Amour」の挿図（図2）である。画面の縦横比や背景こそ幾分異なるものの、原図を忠実に模写している。図3は巻七「欧羅巴洲之部四」中のヴェネツィア市街図で、原図はアダルベール・デ・ボーモンの旅行記「Venise」から引用されている（図4）。



図1 「満州人風俗之図」『輿地誌略』巻2第19丁、板目木版（早稲田大学図書館蔵）



図2 Types mandchoux et toungouses. ("Le Fleuve Amour" par Parga Chefski.) 『Tour du Monde』1860 vol.1, p.109, 木口木版



図3 ウェニス「威内薩市街ノ図」『輿地誌略』巻7第41丁、板目木版（早稲田大学図書館蔵）

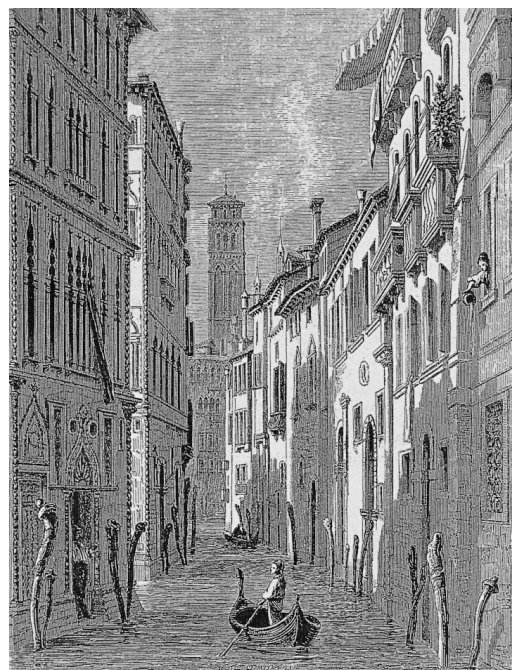


図4 Petit canal Bernardo. ("Venise" par Adalbert de Baeumont.) 『Tour du Monde』1862 vol.2, p.20, 木口木版

引用例の多くは、これらの図のように一点の図版をそのまま模写している。しかし中には、複数の図版を組み合わせて一つの図を構成している例も見られる。図5ではフランス海軍の医師が記したガボン旅行記の挿図三点(図6~8)を組み合わせ、パホイン族の人種のタイプ図を作り上げている。巻九「亜非利加洲下」に掲載されている。



図5 「^{キニニア}下幾内亞土人ノ像」(『ガブーン』河近傍酋長ノ家族/
『パホイン』部落ノ女/同貴族ノ若キ女)『輿地誌略』
巻9第21丁、エッチング(早稲田大学図書館蔵)

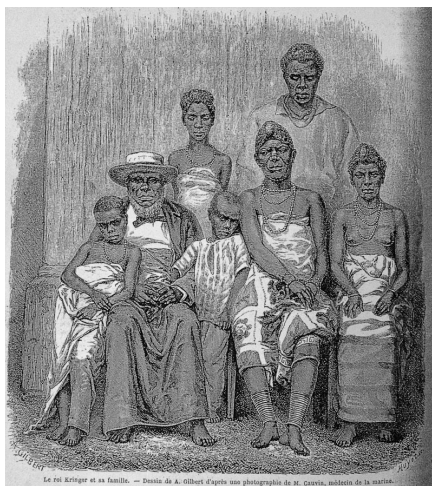


図6 Le roi Kringet et sa famille.
(“Le Gabon” par Griffon du
Bellay.) 『Tour du Monde』 1865
vol.2, P.292, 木口木版

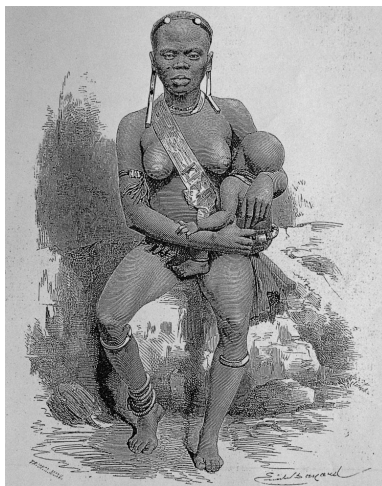


図7 Jeune femme de la tribu des
Pahouins. (“Le Gabon”) 『Tour du
Monde』 1865 vol.2, P.309, 木口木版

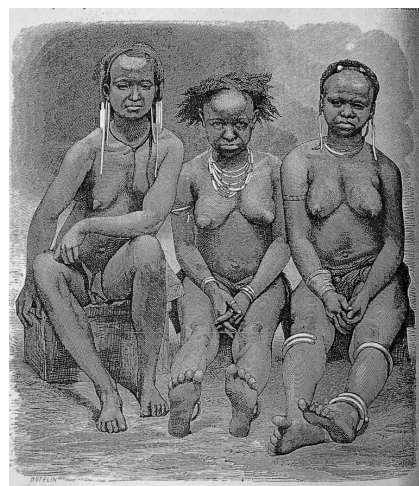


図8 Femmes de la tribu des
Pahouins.
(“Le Gabon”) 『Tour du Monde』
1865 vol.2, P.312, 木口木版

卷十「亜米利加洲上」掲載のカリフォルニア鉱山の図（図9）は、やはり原図（図10）を寸分変わらず模写している。描いたのは当時玄々堂で画工をしていた洋風画家亀井至一。

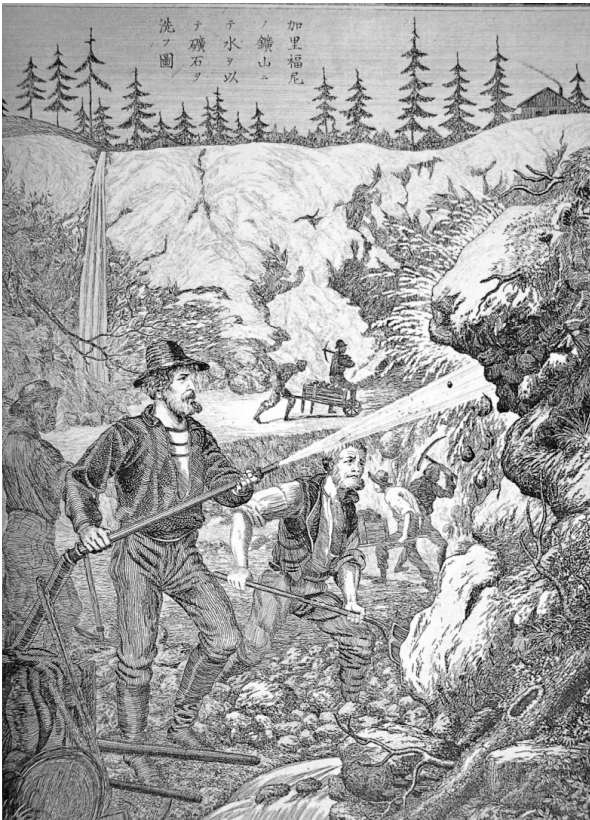


図9 「加里福ニノ鉱山ニテ水ヲ以テ礦石ヲ洗フ図」『輿地誌略』
卷10第40丁、エッチング（早稲田大学図書館蔵）

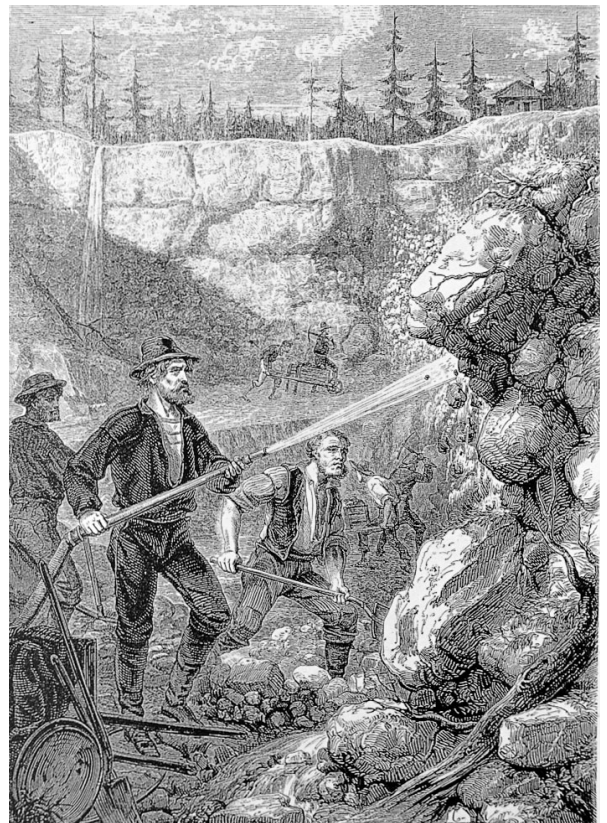


図10 Lavage par la méthode hydraulique.
（“Voyage en Californie” par L. Simonin.）『Tour du Monde』
1862 vol.1, p. 37, 木口木版

図11はアンデス山脈を描いた木口木版（図12）を石版画に写したもので、欄外に「石版画工 野邑重喜/玄々堂 石版部製造」の記載がある。野村重喜も玄々堂に在籍し挿絵を描いた画工である。

ごくわずかな例を選択して比較したにすぎないが、これらの図からは、木版や銅版・石版といった技法の違いはあれ、原画を忠実に模写する姿勢がうかがえる。



図11 「安の斯山ノ全景」『輿地誌略』巻11上第36丁、石版
(早稲田大学図書館蔵)

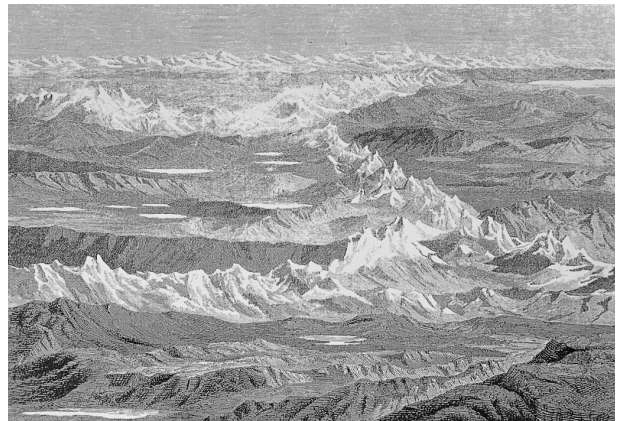


図12 Panorama des Andes, entre le lac supérieur de Titicaca et le lac inférieur de Parihuana-cocha. ("Voyage de L'Océan Atlantique à L'Océan Pacifique, à travers L'Amérique du Sud" par Paul Marcoy.) 『Tour du Monde』 1862 vol. 2, p. 255, 木口木版

引用図版に見られる偏差

今回の調査で判明した原図と『輿地誌略』挿図との詳細な比較は後日稿を改めて行うことにするが、引用図版に見られる傾向について最後に指摘しておきたい。

すでに述べたように、『Tour du Monde』からの図版引用の多くは忠実な模写によっているが、前掲の各巻引用図版点数一覧を見る限り、各巻の引用点数には大きなばらつきが見られる。アジアとアフリカでは図版の引用率が約七割に及んでいるのに対し、ヨーロッパの巻ではこの率が二割に激減する。原典である『Tour du Monde』は旅行記の対象地域を非西欧圏に限ってはおらず、事実誌上には随時ヨーロッパ各地の旅行記が掲載されており、記事の内容や図版にここまで極端な差は見られない。つまり『Tour du Monde』からの引用図版には、何らかの選択的な意図が働いているといえる。

ここで改めて『輿地誌略』の図版を見てみよう。掲載図の平均値は巻により多少前後するが約三十点ほどである。どの巻でも地勢を示す風景図が最も多くを占めるが、人種や風俗を伝える挿図の数は巻により大きなばらつきが見られる。特にその差が顕著なのは、ヨーロッパ編とアジア・アフリカ編である。

アジア・アフリカ編では図1や図6～8のように人種や地域固有の風俗を紹介する挿図が豊富に掲載されるのに対し、ヨーロッパ編ではそれに類する図版がほとんどみられない。大部分は『Tour du Monde』以外の図版から模写されたモニュメンタルな建造物や都市風景で、そこに暮らす人が前面に出てくることはない。『輿地誌略』

におけるヨーロッパ人とは、種としては描かれることのない、いわば「見えない民族」なのである。

そして『輿地誌略』にはもう一つの「見えない民族」が存在している。それは日本人である。『輿地誌略』巻一は、前半が天文学や地理学の基礎知識の解説に費やされ、後半ではアジアの総論とともに日本に関する記述が続く。しかし巻二以降のアジア諸地域とは異なり、ここでは地図を除いて挿図が一切用いられていない。視覚的イメージを数多く用いた『輿地誌略』で、アジアやアフリカ、中南米の記述には人種や風俗図が多数紹介されるのに対し、民族としてのヨーロッパ人と日本人像が欠落していることを我々はどのように理解すればよいのだろうか。

まず考えられるのは、内田が、西欧の世界観をそのまま受け入れ、それに基づいて世界を図示しようとした可能性である⁽¹⁷⁾。『輿地誌略』は前述のように西欧の地誌書に基づいて書かれており、その内容は文明の進度をもって世界を分類するものであった。巻一の総論では、世界は「開化の等級」によって「蛮夷（サヴェエジ）」「未開ノ民（セミバルヘリヤン）」「半開ノ民（ハーフ、シフライライズド）」「文明開化（エンライテンド）」の四つに分類され、それぞれの段階に具体的な地域や生活様式が例として挙げられている⁽¹⁸⁾。

文明が最も進んでいる西欧は、地誌を記述する側、つまり世界を見る主体（subject）であり、自らの姿を改めて対象化する必要はない。それに対し、非西洋文化圏の人や文物は見られる対象（object）であり、人種のタイプや珍しい風俗が精巧かつ迫力ある挿図で紹介されることで、文明化された地域との差異をより強く印象づけることができる。『輿地誌略』ヨーロッパ州の巻で、人種や各地方の風俗よりも、整備された大都市や博物館、記念像、あるいは橋梁といったモニュメンタルな建造物が図版に多く取り上げられているのは、それらが文明の象徴であり、当時の日本に紹介されるべき情報であると内田が考え、参照した資料からイメージを取捨選択した結果に他ならないと考えられる。

同様に、日本に関する図版が登場しないのも以上の視点からの解釈が可能である。西欧を模範とする日本はここでは世界を見る主体となり、民族の姿は表されない。しかし当然ながら、内田自身は日本を文明化の段階にあるとは考えていなかった。先に挙げた文明度を示す分類において、日本がどこに位置するかの言及は一切ない。だがアジア州の概説において内田は次のように述べ、日本はいまだ開化の途上にあることを匂わせている。

「政法風俗ヲ概論スレバ各国皆君主専治或ハ専制ノニ政ニ外ナラズ、皆固陋ニシテ実用、學術ヲ講セズ。故ニ皆高等ナル者モ半開ノ域ニ至ルニ過キスシテ、開化日新ノ邦国稀ナリ。（中略）然ルニ方今吾邦ノ如キハ、朝綱一振シテ開化ノ方向ヲ転ジ、国勢将ニ大ニ隆盛ニ至ラントス。是東洋諸国ノ中、絶テ其類ヲ見ザル所ナリ⁽¹⁹⁾。」

『Tour du Monde』においても幾度か長文の日本旅行記が掲載されており、そこには幕末～明治初期の日本人の様々な風俗が描き出されている。しかしそれらの図が採用されることはなかった。何故ならそれは西欧人の目で客体化された、非文明の段階にある日本の姿だったからである。世界を見る主体であり、また文明開化を目指す日本人である内田が、西洋人の見た自民族の姿を著作にそのまま反映させる訳にはいかなかったのではないだろうか。『輿地誌略』の民族像の欠落からは、近代の日本人が抱えたセルフ・イメージを巡るジレンマが読みとれるのである。

おわりに

物事は語られ、描き出されることによってはじめて「出来事」となる。その語り口や表現は、出来事のありようを大きく左右するが、近代以降のメディア・テクノロジーの発達を経てもその本質は変わらない。本稿では明治初年に広く読まれ、日本人の世界認識を形成する上で大きな影響を与えた『輿地誌略』とその典拠となった『Tour du Monde』図版について簡単な報告を行うに留まったが、そこに表わされるイメージの存在あるいは不在から、どのような世界観や自意識が読み取れるかは非常に興味深い問題であり、今後さらに追求する意味があると思われる。

今後、引き続き『輿地誌略』図像ソースの探索とともに、この書が明治初期の日本に与えた影響について研究を進めていくつもりであるが、この資料は、西洋からもたらされた視覚イメージが日本に何を伝え、またどのような世界観の変化をもたらしたかを考える一つの足がかりとなりうるであろう。

註

- (1) 内田の履歴については主に以下を参照。宮永孝『幕末オランダ留学生の研究』日本経済評論社 1990、あられのや主人（赤松大三郎）「内田恒次郎小伝」『旧幕府』3-1 1898、赤松範一『赤松則良半生談—幕末オランダ留学の記録』平凡社 1977。
- (2) 宮永前掲書p.635。
- (3) 内田の将来した油版の公開歴、およびそれを見た同時代人の記録は「日本美術の十九世紀」展図録（兵庫県立近代美術館 1990）収載の木下直之氏論考（p.73-74）に詳しい。
- (4) これらの参照書籍は、先行研究によって次のように特定されている。「カラムルス氏」→J. Kramers, *Geographisch-Statistisch-Historisch Handboek* Gauda, 1850（石附実『西洋教育の発見』福村出版 1985、p.187,194）、「マツケー氏」→Mackey, *Manual Geography*、「ゴールド、スミス」→Goldsmith, *Grammar of General Geography*（中島満洲夫「内田正雄著『輿地誌略』の研究」『地理』13-11 1868.11、および菅野陽『「米欧回覧実記」と『輿地誌略』の挿絵銅版画』『日本洋学史の研究IX』創元社 1989、p.193）。いずれも稿者は未見であるが、菅野陽氏によればこれらの本の挿図は『輿地誌略』では模写されていないという（菅野前掲論文p.193）。
- (5) 『文部省雑誌』第22号（1874.11）（佐藤秀夫編『明治前期文部省刊行誌集成 第6巻 文部省雑誌 明治6・7・8・9年』歴史文献 1981、pp.150-155）によれば154,200部、『文部省第三年報』（1875、p.617）によれば122,725部となっている。
- (6) ここでは、フレームによって周囲を囲まれ独立している状態を基準に一点と数えた。
- (7) 版による図の違いについては青木茂「ふたりせいしょう」pp.327-329（『油絵初学』筑摩書房 1987）、菅野前掲書pp.185-192において言及されている。
- (8) 『輿地誌略』巻一「凡例」。引用した「世界各地…」以下の箇所は原文では角書。
- (9) 池田厚史「『輿地誌略』と『萬国写真帖』」『Museum』No.501, 1992。
- (10) 青木前掲書pp.338-341、菅野前掲書pp.194-195。
- (11) Annie Lagarde “Édouard Charton 1807-1890” URL : <http://pageperso.aol.fr/lagardehortensia/EdCharton.html>
- (12) シャルトンについては、註11前掲サイトおよびM. Prevost et R. D'Amat, *Dictionnaire de Biographie Française* (Librairie Letouzey et Ané, Paris, 1959) の“Charton (Edouard-Thomas)”の項目を参照。
- (13) Édouard Charton “Preface”, *Le Tour du Monde*, 1^{er} semestre, 1860.
- (14) 『Tour du Monde』の挿絵を担当した画家には、『聖書』やミルトンの『失樂園』の挿絵で知られるギュスターヴ・ドレ（Gustave Doré, 1832-1883）や、ジュール・ヴェルヌ作品の挿絵を手がけたエドゥアール・リオ（Édouard Riou, 1833-1900）らがいた。以下のサイトを参照。Annie Lagarde “Édouard Charton : Les Illustrateurs du Tour du Monde” URL : <http://pageperso.aol.fr/lagardehortensia/TDMillustrateur.html>
- (15) 石附前掲書p.191。但しその根拠は示されていない。
- (16) 巻一は総論及びアジア州の上となっているが、アジア州の部分に掲載されている図は地図二点のみであり、残りは地学・天文学の基礎知識を解説する図であるため、巻一の図版はアジア州の図版総数には加えていない。
- (17) これまでにもこのような指摘はなされてきた。木下直之『写真画論—写真と絵画の結婚』岩波書店 1996、p.88および落合一泰「被写体以前—十九世紀の人類学的写真アルバム」（伊藤俊治・港千尋編『映像人類学の冒険』せりか書房 1999）p.137。
- (18) 『輿地誌略』巻一、第三十六～四十一丁。
- (19) 『輿地誌略』巻一、第六十丁。引用文中の句読点は引用者による。